繪本拾遺信長記

八

へ13
3564
21

門 ヘ 13
號 3564
卷 21

早稲田大學図書館
昭和 34.6.3 受
藏書

目錄

ト中叔上人事
信長難年号トまぐれを菴ゑ上人と撰び
孤如上人南蛇ゑ開き給ふ事
信長晴為宮上人事
ト問教藁武士と戦ふ
地武士号上人を追ふ

石山開城之事

宣專坊籠城

蹴鞠の森御坊門徒の男女系勸の図

明智光秀の諫死之事

石山表開城

教如上人攜州下向

石山燒失

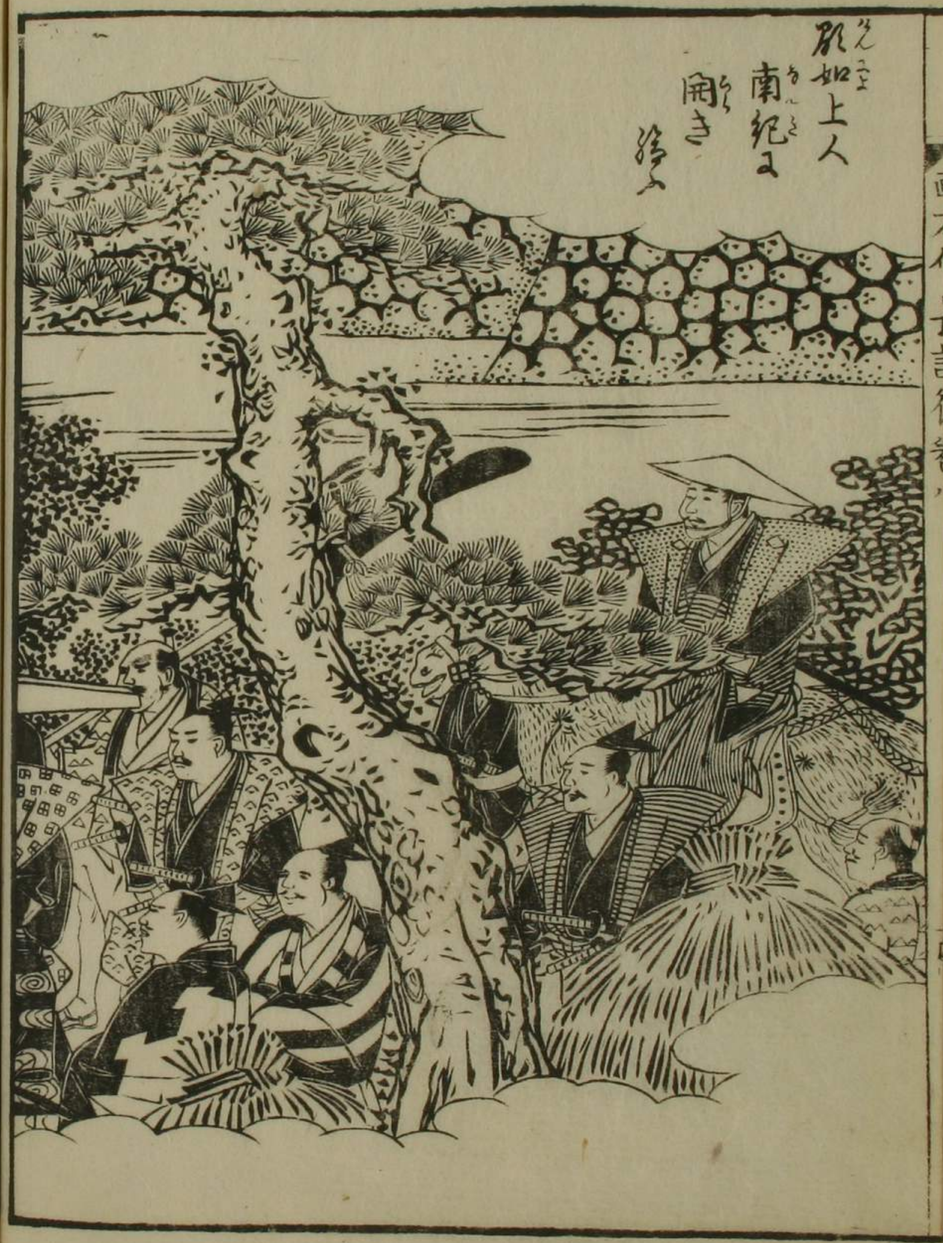
卜半教上人事

扨も教如上人の御嬙男教如上人の御計ひ給ひさしも
芳紀御年の若に方しいせ給いざる麻の衣よ業ぐつとめさま
仕給ひ三人を召つれられ住吉を出て紀ノ路
なる貝塚として急ぐせ給ふ寛なる祖聖人の小舟よさとらん
給ひ吹き雪のなつ〳〵さをもつてひ給ひ海度よ若狭よ
〳〵給ひ給んもかくやとちひあいさんしうト半ハ思ひ〳〵ざる
上人の入〳〵せ給ふ貝塚きに貝よろこびさまぐ〳〵りてさ
まりゐるが信長い邪智ふかく狐鍋ある大ねるれば上人の密よ
此に来〳〵せ給ふと覆ひ知〳〵んもとうとと上人と佛擅の

信長が雑兵ども
ト申ケ
奄々上
人を
搜ル

下に強く手をせ城を弥陀如来の上を守護し居給へ鉄城の
かうめより尚強くとたぶやきく御明をうけ念珠にまぐり
いと契るく正信謁を通し居うるトまゞ推参にたゞまど
うして石山城の周りは小田方の同者共のび居て城中外のみ
さまと伺ひ居るふ今朝城中より比人にきの使者出く紀州路
へ強きうと告々れば比やや上人まくいたりぞるうとく屋敷の
兵又余人トまゞ宅へ押寄り先罵くゆるい今日石山の城
中より比人連の使者出て此宅を宿とうり其僧どもを論議のこ
とあり此不へ出ば比強く取者き曲りうゞと同を角たく
契へのらくうゆるふ々紙トまさらを驚きうる気色もうくうるは
愚僧ど石山より帰りたるふてひよ上人尚月九日退城みて紀州

路の森へうつせ給へはしうけ給りていとまをのる日宿の僧と供
よきのふ本山へ死出ゆうく今方帰りて則老方る僧多、我も
つまとる者ゆそひ何も御論議を取り集もいりに人遠ふく
こそひまんとつふをかの武士多尚もふうを付て論い要之屋捜
せよとこつふりどそあると奥の間茶の間納戸物置湯殿楽部屋云
ふ及ひ早尊宝櫃雑櫃まく捜りうく捜ふ々しとも城ふ仏の慈
護ふや仏櫃ふは心にうびをの僧ど自若うるみさまい何さまいく
きたる者のうきゆうん外と捜せとのこ内く次の宿へでいてき
ふる此トまゞ都りとの美実ふ何気ふきみさまなりしとうんて上人
い抑せ〜と此者どもの退きしなうされば今の世ふも抑りひうう
ざる類ふる紙ふんふよりるき神なうとうひうるいせ〜い此付ふりの


弘法上人
南紀を
開き

ゐんとや上人い尤き雖とト中ゞ勅きうてのゞを移ひ其日ト中
只一人をたつまつり是うく紀州ゑ着せ移ひう

信長隨ゐ宮上人事

同月九日彼如上人紀州鷺の森へうつせ移ふと被露尤御墓所
と尊ゑ男阿茶丸と申御方後ゑ進如上人と申まる今年に歳ゑ
なりせ移ふを御母ゑ合興ゑ御奉物の麓を開うをとう
れいと人の御興ゑ行ゞる紀州しんゐかりとぞ其日の赤赫
紀列さいやうふ美儀をつくろひと人の御通紀とひめき御興の
左右ゑは近士の輩数十人伴備の衆中百人計次ゑ三番の宮
寺坊家発下間教蘆尊ゞ後御供〳〵石山と出て懐として急がせ
移ふ其路ゑは門後の道俗大路に被び涙をうぶし上人を拝まる

着紫十万人とゑ数と知〳〵び徴番宗門の留ん方る今ゑ玉
城どゑゑ白仰ぎゑゑふゑ御法ゑうき程ゑく堺の浦ゑ
着せ移ひ尤より御船ゑ召せまんと御奉物を破ぢ入船
ゑせ御船へうつ〳〵乗りせんとゑゑふ屋尤乃兵士三百余
人は武士山城の姿ゑ出ゑせ此ゑうの本うげ民家の内ゑ
去のび居ゑりしゑとい時分ゑはしゑふ程ゑそゑ上人の御奉
物へ鉄砲ゑ六十挺うけ八方ゑ周を飛ひく付て出ゑう和
歌寺の人〳〵門後の面〳〵仰天〳〵近士伴備名ハ八方へ散乱と
ゑ紀は武士を得ゑうか〳〵と御奉物ゑ立ゑる家と、ゑ〳〵紀
押へ〳〵下間教蘆孫と捺て誣来ゑ悪き雑籍者おのゑ〳〵信長
の世〳〵着ゑゑ歎〳〵討こそ寄懸ゑ一人もせけて伴とまど

其二

とさんぐゝ笑ふる紙被者ども数くゝ信長のまゝしものゝ
目利ぢ遠くぞ戦軍い天下の間ふを人をおびゝ書く戦場ふ雑
来し落武者を籠ゝ武ふるをゝ剃元ゆ武ちるぞや当時大名
ふる家にも勝ふる大富有の所如上人ふ方の酒代を要どんど
通ひまゝと呼ぶ内ゝ八方より元ゝ切ふ笑ふ戦へぎさしもの
下間多勝さひろゝ防ぎうゝて一方と切破りもと来ゝ通へ級受
ひゆ武士多逃る者ふ目いうけば上人の首と元んと御茶物
の戸を開けば上人いまゝまさび茶物ふもるき宣のりもの
こいうふ内の間ふ上人い逃多浴ひるやと沸ると一人の曰く
いやゝ見い本願寺の者ぐもかくなうんとうう知り茶
てすり室茶物を鑒固ゝて此石と送り来りしと見るるう

所如上人いうる悟き法師ふうもの急ちる石ふて茶物と
拾てい逃ましきぞゝ却笑ひ枕い仏偏の中ふ拾ましふ落のび
たると見るるうう退うけて坊を他と吟味せよと八方ふ多ふ
ゝて我方ゝと退ううかくるるに三番の宗専坊逃後ふて
や這ゝのみさまふて他吉の方へ走りる所武士の大ね退うけて
雑ちゝ宗専坊を引捕へおのゝ何者ちるぞ所如上人い何国へ地ち
所ゝやありれまふやさび汝ぢ命い助くゝゝと数くゝふ呼ぶうる
を宗専坊ゝも強ゝ汝名ひ武士強盗ぢゝ今狼藉おゝとて
求むべきふ兵上人と捜ゝ討んとるい小田方の兵年ちるゝ計茶
勅宣ちるゝ小田本願寺和睦とのひ城と開き退き浴へ上人を
伐兵とんて討んと計るい遠勅の衆のゝ人べゝ毎く退く信長

下間
頼廉
雑賀
と
武士

へ此旅きをゆ[illegible]とゝ[illegible]附る[illegible]武士の中より阿同ゞ士卒一人あり
るゞ宮専坊とぞ[illegible]ぐ[illegible]と見[illegible]ぐ[illegible]先こそ彼如上人を遠ひ[illegible]し先
年石山城の矢倉に出て念佛と唱へる様よく〳〵見知て相違
なしとゝ宮専坊これを聞て扨い信長ゞ属手の者ゞ寄つゝ我と
上人とをひしこそ幸なり渠名ゞ討まゝ歟と歟きゝ[illegible]ば先ゞ[illegible]
ふる忠義あるべしと言系を改め系[illegible]をつくろひ我と見[illegible]
[illegible]ひゞ石山の彼如先[illegible]我ゞるぞやゞ[illegible]前
を見[illegible]ゞ[illegible]ゞ来朝ゞひゝの彼ひあり今朝紀州へ[illegible]
る雅き者の命ひゝと聞けゝ[illegible]信長へ中達とゞ[illegible]今ゝ[illegible]
ゞもゝ[illegible]ゝ[illegible]ゞ[illegible]前と切[illegible]と西ゞ向ひ[illegible]と[illegible]合掌し
称名念佛ゞ[illegible]く唱へ[illegible]ば小田方の兵卒どもゞ命とゝ[illegible]ゞ

るき聖と討まゝゞ来来の衆の中を潜〳〵ゝく我討んゝ云
者なく〳〵附をぞゝ〳〵ゞ宮ゞ小田方の雑武士のゝちゞ
神谷ゞ郎兵衛とゝ者あり先祖より代〳〵親類宗門ゞ[illegible]
〳〵ふゝして上人を敵ひ系〳〵せ宗恩と敵じ[illegible]ゝと今日の
討手の中ゞ変[illegible]さま〳〵心と変せ〳〵に堀浦ゞて御祭物の
[illegible]なる小心よろこび後者の方ゞ来ゝ[illegible]ゞ彼如上人と捕へま
いらせ只今首を討まゝ〳〵ゝ[illegible]ゝ雑卒の呼ゝ[illegible]ゝ様ゞとひ
しく一番にゝけ来ゝ西ゞ向ひ念佛唱へ居ゝ聖人とゝ〳〵
こしい彼如上人ゝていはしまゝ[illegible]ゞ宮ゞ[illegible]めて心と安んゞ味方の
者ゞ向ひたきに笑ひ汝達此坊ゞ[illegible]ゞ歎きむゞ骨折て後の男ひと
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゞ[illegible]ゝ[illegible]ゞ三番の宮専坊我ゝく

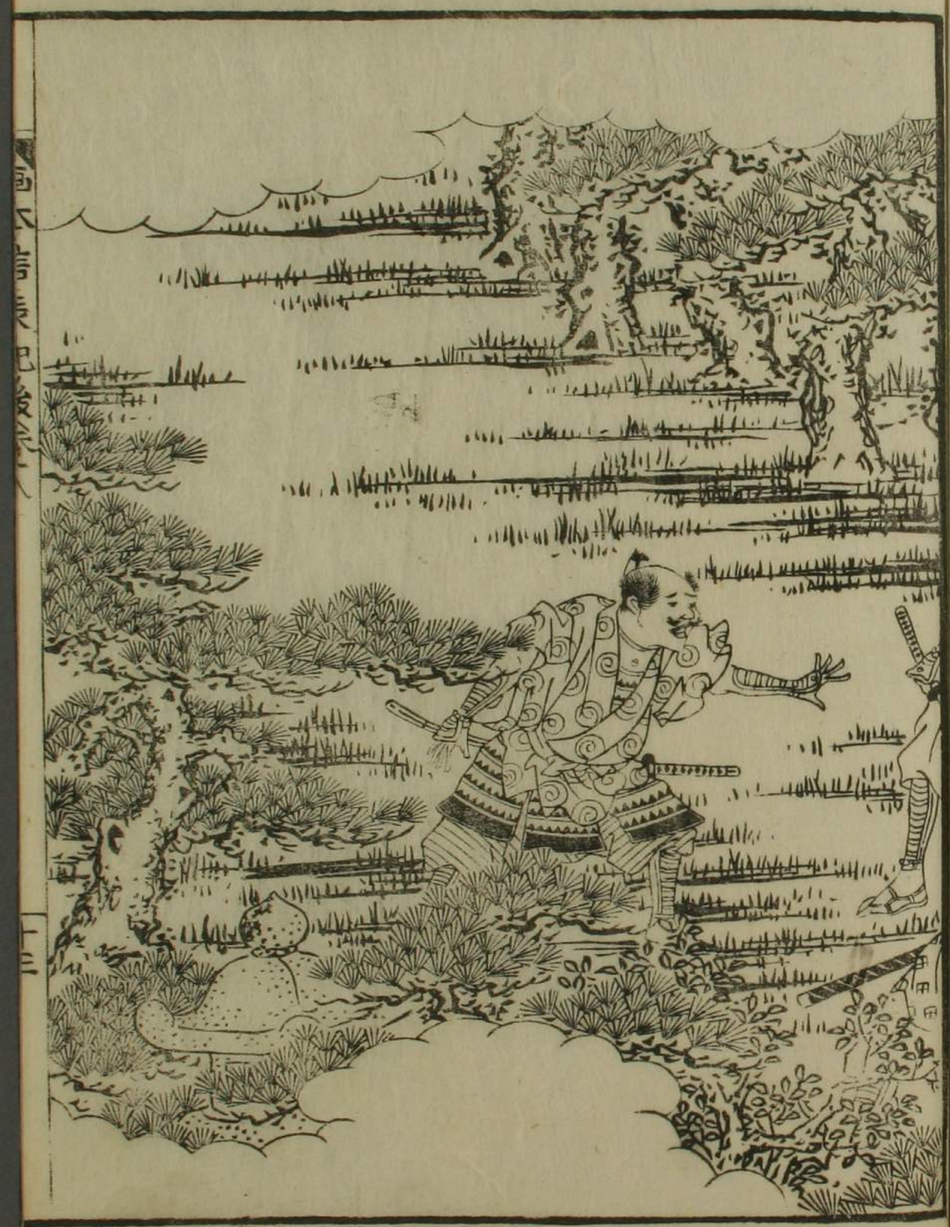
弾正忠信長
上人と
追ふ

すり丸光へあり宗專坊が倍孫い摘七郎左衛門勢卅ようく發く
合戦をなし右の光よ鉄炮疵三ケ所あり宗專坊は疵を改め見ん
いくとつよ拵武士を遣てさしべ其疵を打くとあよと引例してて
ぞる小神谷が詞よ遠つび其疵あり扨い宗專坊よ遠ひなし戦く
光秀武者の衣おを剥ぎを勝利とせり数用の坊を着何よせ
んとけさ衣を引剥く皆ちりぐくよ保くる

石山開城の事

去ぐ小所如上人い先達て急なく紀州雑賀よ若せ移ひ出國の
門徒を馳集りて信の森とつふ所に一ちうの坊舎を建立こと
仮の本堂とるされ御其新を安置まし〳〵去ぐ〳〵此所城御住
居の地と定めるさるれば小田右左衛信長云所如上人退去の上い

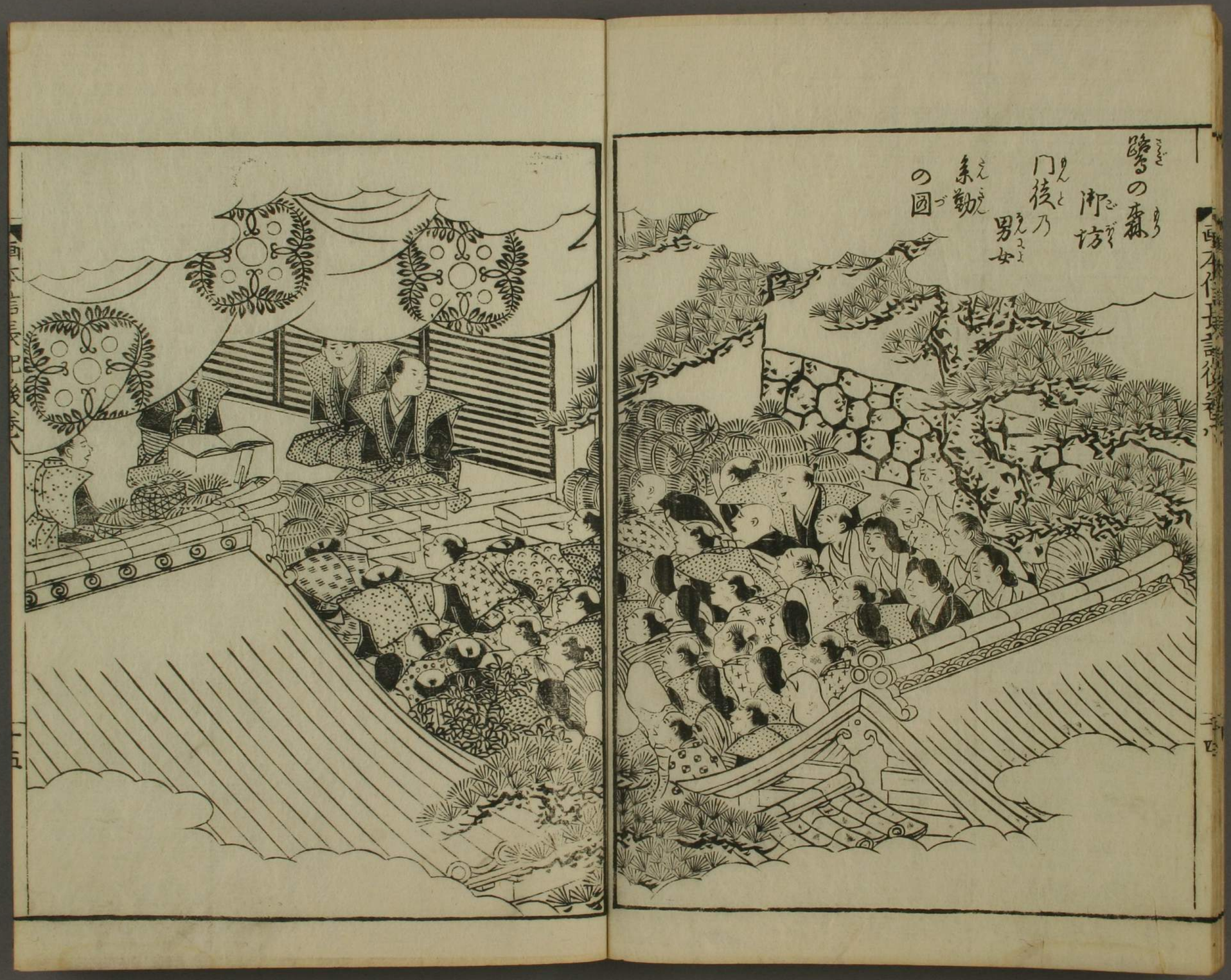
石山の城地よ〳〵請ぶ申し〳〵豚間右衛門尉矢部若七郎を
人よ命〳〵摂州よ馳ひむ附よ石山の城中よは所如上人の嫡男
教如光秀上人再び門徒をかるらひ雲國よ籠城〳〵て防戦の用
意きびしく城地引渡ぶるきを光よ申し光れば豚間
矢部の両人去きに弱き急ぎ信長云へ此者つまびくく小言上〳〵
光れば信長云い所如上人退城の砌ひそう小矢ひまいくせんとの謀計
もむなしくなり今よ彰門光秀勅宣よ遠ひ祈言書よ肖き再び
籠城せるよしを安ていうんぞやこれを如う拵いざらん今い國この
軍兵を催ぶし所如天よ前と見んぞい祈言く軍とうへと日比
の強暴百倍〳〵て東海東山小陸の軍勢を催〳〵其外い光秀京都よ
馳登り禁廷よ參内〳〵て所如教如が遠勅の罪と奏聞し渠等を



宮專坊
雜俗

諸代とゝべきの宣旨を以下さるべきよしきんてい奏し給ひける
よ禁廷これゝ為ふ志ゝ諸卿を集め御評議ゝ信長が
や条理なきにあらざるとゝ先紀州鷺の森に如上人よ勅使を下
さし遣る光秀石山籠城の後勅を受むくの条言語道断とやく
開城致さるゝふ抑しくい朝敵本願寺と諸代とゝべきの論者と信長
よ綸旨とやと責さ世給ふよ如上人恐き入く勅旨に背くべき
度勅命の新きと恐き拝言書の背くゝ悼て遠よ西國
へ退去致しの者に新門光秀殺て以心致さゞ我志よ遠い強よ石山
よ聞うひよ天王寺のわゞ恐き奏うゝ度ゝ矢石加へ人ゝ雷て以て
開ひゝわゞふ今い勅命ゝ「我牛退去致」てゝ以人渠ゝ後よ
抑ひくい致るあらざ天ゝてまりせゝ給るゝと言へたまへ

先よ人ゝ在田勅使寺の両卿石山よ下向ありて遠勅の旨を紀明し
給へ数如上人謹ゝ抑此度小田と和睦ゝ勅命ゝ又如のゝ
うけ給り西山退去の後勅言ゝ「いよ」後よ知りて以人先数如
よ抑ひて一向一言の相違よ及ゝ更ようけ給りやうゝ致るよ
て以其上信長い表裡不信のわふ以人ゝ我ゝゝ退城の時を結て敵
害せんと計るよ知るゝ「ゝ」と此るよを以て又を以て諸以人ゝ又
曾て開ひやさゝ却て我を勘当致しの条今ゝ又の開いきと
て以況や又西山と出るの付泉の堺ゝて狼藉のうるまひありく
既よ発ゝ「ゝ」小田方の不審るとゝ在くられゝ又ゝ諸先
西城を開き紀邦ようゝ信長ゝ共謀よ隔ゝ宗門永くゝ亡び
うんよを歎きうゝに義城ゝてさむらふかゝと言へたまふ


鶯の森
御坊
門徒乃
男女
系勤
の図

両卿ひとしく宮ゝ中うい普天の下王民ゝ万ゝ ざるいな[illegible]動をなく
和睦なるとしめ給ふゝ落りぶ〳〵て彩城せるいぶゝ是朝歟うぶ〳〵
一さび朝歟の名ゝ世の為其門の業[illegible]ゝ今ゝをいまぐさうぶ
遠ゝ嵩山と退き何国ゝそもあるぶ心ちぶう小法流を勧化みんと
そ宗旨の心ゝもかゝるゝ[illegible]ぶとさまゝ仏ゝらゝ[illegible]ぶ今ゝ
いうゝまるべきゆうもいうぶとく彰門得心ありて来る七月廿
八日まゝぐゝ諸勢のゝ[illegible]ぶゝ嵩城お渡[illegible]ゝべき右御差ゝ
て座田勧修寺両卿も帰京[illegible]ゝ石山城い多論本願樓の
岸川外口丸山廣芸山藤倉荒振[illegible]ぶと[illegible]摂河泉の間
ゝ又十一箇所の砦ゝ義ゝ居ゝ[illegible]ゝ今日をかぎりと用き
明てをのがさまゝ〳〵右往左往ゝ引ちゝふ教如上人いゝ細ありて

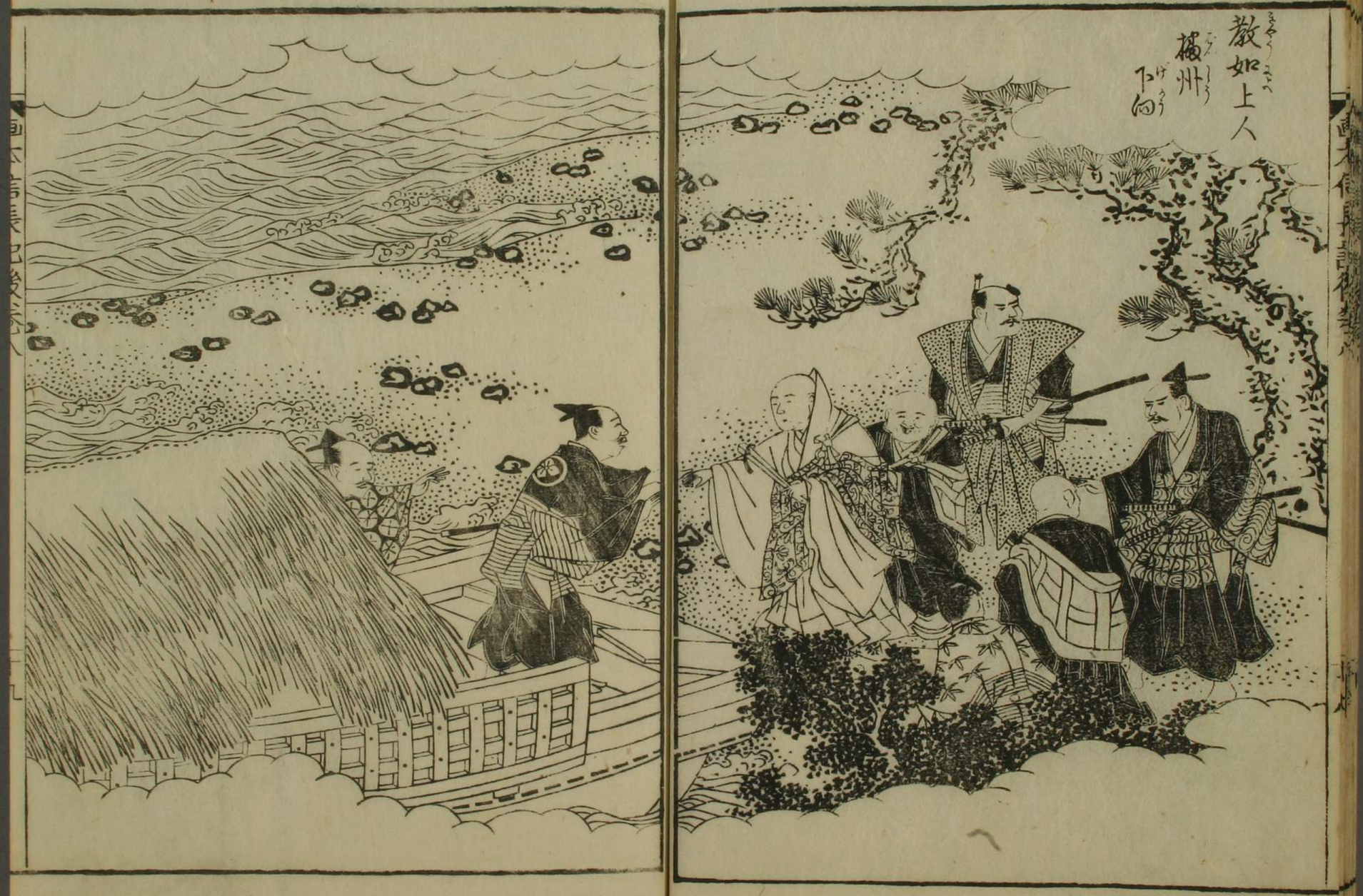
七月廿六日の夜ひそう小城とゝのび出給ひ御紙ゝ石ゝ[illegible]の森
へ入〳〵せ給ふゝ是ぶ小田家ゝう城信ゝの役人阿閦矢都の面人
再びゝ向〳〵石山ゝ入城〳〵ゝまゝ〳〵ゝ番ゝを居堅固ゝ守ゝ
ゝ所ゝに八月二日の夜天火落りて湯堂殿舎宮ゝものゝ[illegible]ぶ田舗
ゝ及びゝる城ゝ嵩山い聖徳ゝの未来記ゝまうせゝく草創ゝ
〳〵霊場をあじきゝるゝ兵馬の足ゝ汚さんゝを佛のみくゝた
まひゝく怒ゝ引ゝらひ給ひゝるゝ悪〳〵まゝる者ゝ[illegible]ぶ〳〵
明憲ゝ年蓮如上人嵩山を遠ゝ[illegible]〳〵てより今年天正八年
まゝく八十ゝ年ゝ間お續ありゝる御山と一対の煙ゝ[illegible]ゝ
を門ゝの道俗ゝをあげ悪魔ゝうぎりゝうゝ

明智光秀謀叛之事

石山表
開城

備も所如上人い紙俵國後の森へ猶ほしく〳〵しぐる信長
ゟ狼心を抑へ難き為ひ石舟の狼籍やみべきなと家老諸門後う
いうるまぐ安き心いさらふたく〳〵あやうき月日をおくせ為ひぬ
信長云へも年来弾正石山の城地を得為い〜ことでる
背懐を敷ひ〳〵ゟ教如上人絵を背きのこうて籠城ありしゟ
ゟど深く懐う為ひぜひ〳〵上人御ゟるを嘗せんりのく撰ぐ
工夫を凝〜為ひ〳〵ゟ勅宣の旋きとか〜遣旋ひとの
祈願書の墨も乾ゟざるゟ妻討んゟもありぐ〳〵ゟぐ〳〵ゟぐ〳〵猶
籍のゟ法もるうりしゟ〳〵ふ本願寺ゟは今い信長の姫うも解
〜〜やと〳〵心を安んぐ為ふゟ二ケ年ゟ経い来ゟ〜て去ひゟ
天正十年の又月中國毛利家征伐のゟ信長下向ゟべきゟうて

諸大ゟ命〜て退〳〵ゟさしひ下うる左中國い先年より羽柴
筑前守秀吉下向〜て去ばく〳〵毛利家と對戦ひ此度加勢
として信長發向ある序ゟ四國九州をぐ〳〵責伏らるべき
との御ゟうて御息男神戸侍従信孝ひ國征伐の為大ゟひと
て二万余騎を引率ひく進發ある其後又ゟ羽又郎左衛門
長秀相從ふく既ゟ堺表まぐ出張ひ此舟信長能打うる
ゟば警ゟの森ひて一向宗の坊ゟ茅ゟ門後ぐ〳〵を誅せんりのと
兼て其羽又郎左衛門ゟ中令ひ國渡海と抵嶽〜不云ひ
發て警ゟの森へ押〜ゟせ本願寺と表干ぐ〳〵と命せらるゟ
長秀ゟ要組め〜こまり堺の深すてゟ分ゟ〳〵警ゟの森へ押寄
んと密ゟ其用意云ゟくゟり為ふ此打義信長云の勇猛智


教如上人
摂州
下向

日向守光秀信長公と眼こをかう謀叛の企ありがこしと中國の加勢として先陣を殺向とべき旨命せらるゝ又月廿八日安土を立て本國丹州亀山へ帰りあり信長いよ〳〵本能寺を囲ん為の御籠本の勢纔に三百余人滞留の内と光秀幸の河なり世期を失ふべきとくいよ〳〵謀叛のこゝろ定めがたし光秀の射る矢ふつ〳〵恩恵をめぐらしたるいま我信長と討得るとも柴田勝家瀧川一益丹羽長秀羽柴秀吉が小牛いづるも信長恩顧の輩どもるしば馳参つて我を伐ば其射る矢ふつ〳〵天をさしたゝ諸國を令〳〵く味方と拵んと囲この固めを軍いい本能寺をたゝかうみだりたに元来本能寺門徒の面〳〵年来信長と眼こをあるいが冤恨の

方人なるべ〳〵と恩業〳〵又月廿八日の夜半と急使と紀州路の森へ立て密と取如上人と書状を送れ其文の旨云ふ信長年来本能寺の宗門とふ〳〵法滅せんとこゝろ石山の地を不取と幸せ度〳〵合戦と及ぶ〳〵も数軍の〳〵て勝利と得ば寄と抑ひく禁延へ奏〳〵勅宣を仰く絶と石山と奪ひ上人御ゝ門ゝ御ゝ勢ひを振ひ〳〵き剃へ世〳〵ひに國征伐と号し三七信孝丹羽長秀等大軍と率し摂の津へ發向ふ〳〵し其寄い取ふ〳〵て本能寺と責ん結構なり信長い天魔の心と似く佛法を障碍せんとこゝろ定め光と神護不退の叡山を焼崩〳〵今と高野山とも滅却せしめん〳〵と光秀のゝ〳〵ものどもとゝるふ去のびびつまびらかと細と

失燒山石

上人さぶらひ信長ゞ軍勢の面いざるこゝ有にゝ又〻御用ゝ云あり
給ひ万一防戦難儀ゝ及びいらく某ひそうふこしを敵ひ来り
ゝ〻とくゝゝ御申ひのみほどくくとぞ告うり名所如上人此知
らせゝ驚き給ふゝ大方うゝ一家中ゝ集めさまゞく評議
みゝゝ小光秀ゝまで出山くゝ言信と通〻うるゝもなきう
今かくれでゝく密ゝを告来るゝ心得ゞと対文信長いを
君ゝ〻て光秀い股肱の臣ゝしゝ主の悪ゝを云云
出寺の方人せんとゝ申ゝいぶらくゝ議論あり名ふ
下間頼廉ゝ名いこれい信長ゞ謀計ゝこそ扨ゞ〻ひ光秀を
〻てかくのごゝ密ゝを告知〻せ出寺ゝ機なりこ急ぎ国
くの門徒を奪ひ防戦の用意ゝ成るゝばといやな敵寺こそ再

び勅命の重きを忘れ信長ゝ敵対せんこゝあまこそ朝敵敵
をまじと追討の宣旨を下し討ゝ成さしゆんとのうくこ
そ〻ひ猛りゝ強ぎうば敵の謀ゝ落入ひ〻と申名
ゝ何さま信長ゞ英雄さもみひ〻と皆く此後ゝ用
用云いせざり名り

繪本拾遺信長記後篇巻之八終